

バリー・ウェルマン

個人間ネットワークとしての社会を徹底的に読み解く

野沢慎司

明治学院大学社会学部 教授

バリー・ウェルマンほど、社会的ネットワークという概念に強くこだわってその意味を説き続けた社会学者はいないだろう。彼は、ネットワークとしての社会と個人を分析する意義を長年にわたって実証し続け、研究領域の境界を超え、国境を超えて、多くの人々に影響を与え続けた。社会的ネットワーク分析の国際学会 (INSNA) の創設者の一人であり、世界中のネットワーク分析研究者のネットワークを築き上げ、当時も、そしてトロント大学を引退した今も、この学会のメーリングリスト (SOCNET) 上などで活発な情報発信者であり続けている。

私は、まだ若手研究者だった1995~96年の10ヶ月間を、彼が当時拠点としていたトロント大学の(今はなき)都市コミュニティ研究センターで客員研究員として過ごした。ホスト教授である彼の大学院での授業も聴講し、様々に研究指導をいただいた。短い期間ではあったが、その活発な研究コミュニティを直に体験した影響は大きかった。そこで目撃したのは、社会学や隣接領域でネットワーク分析の潜在力がまだ十分に理解されていない状況を変えるために、研究と教育に並々ならぬ情熱を傾ける彼の姿であった。

ウェルマンは、1979年に発表した2つの論文(下記の拙訳参照)において、地域コミュニティに視野を限定しているために、従来の都市コミュニティ研究はコミュニティ喪失か存続かという間違っただ論争に陥っていると批判した。そこにパーソナル・ネットワークという新しい「眼鏡」(方法論)をもちこむことで、「コミュニティ解放」という第3の解答を提示してみせたこれらの論文によって、一躍注目を浴びることになった。このブレイクスルーは、ネットワーク概念に依拠する理論と方法論(1988年の共編著 *Social Structures: A Network Approach* を参照)が、カナダ最大の都市、トロントのイースト・ヨーク住民を対象とした調査データの分析とリンクし

たことによって生まれた。

1960年代と1970年代に行われたイースト・ヨーク調査は、住民の個人ネットワーク特性を捉える数量データを多角的に収集したものであるが、同時に事例インタビューによる質的データも収集しており、ミックスド・メソッドを駆使した分厚いデータである。当時、ウェルマンのネットワーク論的なコミュニティ論の魅力が日本を含む多くの国々の若手研究者や大学院生を多数彼の下へと引き寄せていた。そして、上記イースト・ヨーク調査データを使った論文を次々と発表していた。彼の主張の新しさを実証するために、上記の調査データを長年にわたって徹底的に使い倒したという印象がある。それほど、この調査データに基づくネットワーク分析は多角的、多面的であった。

その後には彼は、インターネットや携帯端末の普及によって、個人ネットワークがどう変化したかという問いに関心を移し、自らの国際的なネットワークを駆使して多くの共同研究などを展開した。そして、「ネットワーク化した個人主義 (networked individualism)」という大きな命題にたどり着いた。彼を知る者であれば、研究対象、理論、方法、データを相互にリンクさせながら研究を進化させてきたバリー・ウェルマンを「達人」と呼ぶことに躊躇する者は誰一人としていないだろう。

文献

- ウェルマン, B. (野沢慎司・立山徳子訳), 2006, 「コミュニティ問題—イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房, 159-200。
- ウェルマン, B.・レイトン, B. (野沢慎司訳), 2012, 「ネットワーク、近隣, コミュニティ—コミュニティ問題研究へのアプローチ」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社, 89-126。



Column
調査の
達人

倉沢 進

資料変換的方法

浅川 達人

明治学院大学社会学部 教授

大学院の講義で、倉沢進先生が「エレガントな研究」として紹介して下さった先行研究がある。ナタリー・ロゴフの研究である。ロゴフは、アメリカの階層構造が自由平等の原則に向かっており社会的移動性が増大しつつあるのか、逆に移動が減少し階層構造が固定しつつあるのかという論争に対して、世代間の職業移動を二つの時期において比較し、社会移動が増大していることを立証し論争に一石を投じた。「この論争について、諸君ならどうやって立証するだろうか？」倉沢先生はそう、私たち大学院生に問いかけた。

「諸君はすぐに、調査票を用いた現地調査をすると答えるだろう。」倉沢先生は血気盛んな院生たちを諭すように説明して下さった。「よく考えてみなさい。親子二世代の職業をペアにして、欠損なく大量に調査票で調べるのは容易なことではない。これをロゴフは実にエレガントな方法でクリアしたのだ。」ロゴフが用いたのは、「結婚許可証の申請書に記載された本人と父親の職業であった。ロゴフは、第一次大戦前の七年間と、第二次大戦前の三年半の間に、インディアナポリス市とその周辺地区で提出された結婚許可申請書を分析するという巧妙な方法を用いて、過去にさかのぼって世代間移動を調査することに成功したのである。しかも結婚申請書を用いて年齢をコントロールし、世代間移動研究の方法論上のアキレス腱である本人の年齢に伴う難点をも解消してしまった。あざやかという他ないのである。」(倉沢, 1968 : 382)。

このように、本来調査研究目的のために収集された資料ではない資料を、調査研究に活用する方法を、倉沢先生は「資料変換的方法」と呼び、この方法は既存統計資料の二次的分析とともに「最近不当に軽視されており、社会調査といえは調査票を用いた現地調査に直ちにはする傾向が存在する。」(前掲書: 383) として批判した。

ロゴフの研究を紹介した後に、このような方法は

日本の社会学においても少なくないとして、笹森秀雄先生の香典帳調査を紹介して下さった。香典帳とは、香や花の代わりとして故人の霊前に供える金銭を記した帳簿である。逝去の報に接して人は故人、ならびにその家との関係



を斟酌し、香典の額を決め、供える。故人が生前に意識していたか否かにかかわらず、故人を取り囲んでいた社会関係の網が、その網を構成する糸の太さを金額の多寡で示しながら、帳簿上にもごとくに描かれている。笹森秀雄先生は1950年代に、香典帳調査にもとづいて社会関係の網を克明に描いて見せたのである。

倉沢先生は、調査票を用いた現地調査による第一次資料の収集の価値を軽視していたわけでは、もちろんない。「それだけが社会調査の唯一無二の方法であると誤解するな」と、私たち院生に教えて下さったのである。私たちはその後、倉沢先生と一緒に、国勢調査、事業所統計調査、各種会員名簿、NTTタウンページデータベースなどを用いて大量の主題図を描いた。また、KS法クラスター分析を用いて社会地区を析出する社会地区分析によって社会地図を描き、それらの研究成果をまとめて『新編東京圏の社会地図1975-90』として世に問うた。資料変換的方法によって東京圏の社会空間構造を分析するという調査研究を行ったのである。既存統計資料の二次的分析に加えて、資料変換的方法についても、継承していく必要が我々にはあると考えている。

文献

倉沢 進, 1968, 「社会学と社会調査」 綿貫讓治・松原治郎・福武直編『社会学研究入門』 東京大学出版会, 361-396。